

人は何故読書を必要とするのか
——読書離れから考える人類の課題

呉 怡恬(ゴ イテン)

慶應義塾大学文学部国文学科(中国)

1、はじめに

身近な話題としてメディアで繰り返し取り議論されている「読書離れ」が年々深刻になっている。平成25年に文化庁が行った「国語に関する世論調査」によると、「1か月に読む本の冊数について」に対し、割合が最も高いのは「読まない」(47.5%)で、さらに「読書量は減っている」と答える割合も65.1%と最も高い。また、「読書をすることの良いところは何だと思うか」に対し、61.6%の回答が「新しい知識や情報を得られること」だった。

では、なぜ多くの人が、本から新しい知識や情報を得なくなったのか。原因は新しい情報メディアの普及である。同調査によると、「読書量が減っている理由」について、情報機器で時間が取られる」が26.3%で、「テレビの方が魅力的である」が21.8%。平成20年度と比較すると、「情報機器で時間が取られる」の割合が12ポイントも高くなっている。

読書離れの理由は、現代社会における科学技術の進歩による新しいジャンルのメディアの展開だと考えると、その現象は日本だけではなく、世界中に広がる問題でもあると考えられる。確かに、印刷物は、情報の速報性や検索の利便性などは、テレビやインターネットなどのメディアには勝てないのは事実である。では、読書離れは本当に発展の必然的帰結なのか。現代社会での情報収集において、新しいメディアと書籍とのバランスはどうとすべきなのか。本論文は、この問題に注目し、読書の社会的価値を再確認する。

2、テレビ、インターネットにおける問題点

世間の注目を浴びるニュースが出るたび、多くのメディアが同じ内容を報じる。そのような光景は、誰でも見たことがあるだろう。一つの話題が一気に中心となる。そのような情報の中心化により、大衆が次々と流行を追い、注目されるものは増々注目され、注目されな

いものは増々注目されなくなるというマタイの法則が生じる。情報伝達が発達したいま、人々が豊かな情報量を享受し、情報を自由に選択できていると思っているが、毎日自分が目にする情報は、注目度や速報性によって選択されているかもしれない。

そのような選択された情報は、偏見や誤解を生む可能性がある。難民の犯罪事件に対する報道が出るたび世界規模で難民全体に対する非難が高まり、日本と中国やロシア、韓国などとの領土問題が報じられるたび、民間の隣国への敵対心が急速に高まる。例えば、2010年9月に起きた中国漁船衝突事件の直後の2010年10月、「外交に関する世論調査」を受けた日本人は、「あなたは、中国に親しみに感じますか」という質問に対し、「親しみを感ぜない」のは77.8%で、前年同月と比べて19.3%も増えた。世論はいかにニュースに影響されやすいかがここにみられる。しかし、ニュースというのは、非常事態ということであり、遠い国に対し、大衆が認識する現実とは、メディアによって変形されている。だが、それはあくまで非常事態に対する認識であり、国というのは、文化や歴史も含め、様々な要素が積み重なった総体であり、むしろ非常ではなく日常であり、より普遍的なものとの積み重ねである。国に対する評価が簡単に目の前のニュースに左右されるのは、短絡的な見方ともいえるだろう。

アメリカのメディア研究者ガープナーはこのような、メディアが描く「シンボリック現実」の影響を受けている「主観的現実」を、「カルティベーション(培養)効果」と呼んだ。ガープナーによれば、テレビ視聴の累積効果が我々の世界認識をゆがませる。ガープナーの研究により、テレビを視聴する時間の長い人ほど、この世の中が犯罪に満ちていると認識する傾向があるという¹。

また、ニューメディアが生み出したもう一つの弊害は、人の思考力を低下させる可能性があることである。常に新しいものを求める習慣には、健忘が潜んでいて、そこには一定の時間が過ぎるとすぐにニュースを忘れてしまう傾向もみられる。例えどのような深刻なニュースでも、番組の途中で無関係なCMが流れ、観衆の注意力をそらすことになる。手に

¹ 橋本良明、『メディアと日本人』、岩波書店、2011年3月18日、p.35.

入りやすい情報量が膨大であるゆえ、集中力を低下させる結果に至る場合も多い。結果としては、同情心や共感心も鈍くなっていく。戦争や犯罪などは、自分とは関係なく、ただ遠い所に起きたことと見えて、チャンネルを変えればすぐそれを忘れる。次々と情報を受ける忙しさで「なぜそのようなことが起きたのか?」、「当事者はどのような心境なのか?」などのことも考えなくなる。

科学技術の発展は諸刃の剣という言い方がある。それはよく環境汚染や兵器などの問題が取り上げられるときに使われるが、科学進歩がメディアにもたらす負の影響は探らないと認知できない危険性を持ち、そのような危険は、苦痛ではなく、逆に思考の怠惰、共感心の鈍さという愉しみにみえてしまうかもしれない。

3. 読書が教えること

書籍とニューメディアは、お互いの不足点を補完する役割を担っていると考えられる。ニューメディアが主に担う役割は速さと利便性だとすれば、書籍が人に教えるのは深さであり、また書籍は利便性が欠けるゆえ、より人の能動的な能力を求め、それを強めることもできるであろう。

目の前に流れる画像や動画を見るのとは異なって、読書という行為は、本を選ぶことからすでに、能動的な傾向が含まれている。読書は目で活字を追うことであり、それゆえ、集中力がより必要とされ、加えて読書ノートを取ることもしばしば読書に伴い、知識を吸収、復唱も行ない、知識に対する理解が深まる。さらにニューメディアによくある匿名性とは異なって、書籍は作者の主観、人間性も表している場合が多い。表面的の事実だけではなく、物事の形成とその原因、作者や作中人物の心理活動も表している。それゆえ読書は、思考力、理解力を養う活動となる。

その効果については、文部科学省が支援し、いまは全国20000校以上²で実施した「朝の読書」運動からも見られる。運動に参加した子供たちから、「集中力がついた」「豊

² http://tohan.jp/topics/upload_pdf/asadoku_school.pdf、閲覧日 2016年10月13日

かな心と人間関係が育まれた」という感想が寄せられ、教諭は「特に生徒の生活や言動に落ち着きが見られ、衝動的な行動をとる生徒がいなくなり、友達に対しても優しい思いやりの心がでてきたのです」と述べている。ちなみに、運動の背景の一つとなったのは、当時学校現場でのいじめ現象や学級崩壊などが頻発し、さらにメディアで連日取り上げられた神戸中学生殺人事件が世の中を震撼させていたという現状である³。人々が考えたこどもの心の教育の欠如への対策は、読書である。なぜならば、読書が人に教える理解力は、知識への理解だけではなく、それはより普遍的で、人間に関わる他人への理解、同情心でもあるからである。

ニューメディアが人間に知らせるのは「事件」なのに対し、読書が人に教えるのは「人」であり、人類の普遍的な価値観である。

毎年文学界の一大事として世間の注目を浴びるノーベル文学賞選考基準について、ノーベルは遺言でそのように述べている。「一部は、文学の分野で理想主義的傾向のもっともすぐれた作品を創作した人物に…」。遺言にある「理想主義」について、ユールステン教授は「人類にとっての善、そして人間らしさ、コモンセンス、進歩と幸福のために努力すること」と解釈している⁴。文学に対する評価は主観であり、評価基準もひとによるものであるが、ノーベルが述べた「理想主義」は、人々の文学へ対する最も普遍的な期待であろう。それは戦争や犯罪の対極にある、平和と日常への賛歌である。

すでに述べたように、領土紛争などのニュースが流れるたび、日本の隣国への敵対が強まる。それは中国でも同じである。だが、そのような反日思想がまだまだ消えられない中国でも、毎年のノーベル文学賞の発表が近づくと、国境を越え、村上春樹の話題で

³ 朝の読書推進協議会、『「朝の読書」はもうひとつの学校』、メディアパル、2005年11月30日、p.22.、p.36.

⁴ 矢野暢、『ノーベル賞』、中央公論社、1988年11月25日、p.140.、p.142.

盛り上がり、これを機に文学を熱く語る人が多い。平和の空気が流れている。それも読書が人に与えた平和であろう⁵。

平和と友好に満ちた世界は永遠の夢かもしれない。だが、その夢に近づく方法はある。それは、お互いに理解しようとする態勢を整え、そして人類共通の価値観を築くことである。人間は積み重ねた知恵を能動的に使い、環境を変える能力を持っている。流れる情報にただ受動的に目を通すことでは、知るだけであり、理解とは言えない。書籍を選び、手に取って、読み、考え、能動的に何を理解し、得る情報は様々だが、それらの情報を理解してまとめた経験は、共通した価値観に導く。それを活用することこそが世界を変える。それが知るという行為の最終目的ではないか。

⁵ 産経新聞、『ノーベル賞逃したが...中国で村上春樹人気の不思議「繊細な心理描写」
「時代の不安感」...政治姿勢に共感も?』も参照できる。

<http://www.sankei.com/world/news/161013/wor1610130039-n1.html>、閲覧日 2016年
10月13日